

NHK 連続テレビ小説『エール』とキリスト教  
キリスト教主義大学が大切にしたいこと - 『敬神愛人』

西原 廉太



にしはら れんた  
西原 廉太

1962年、京都府生まれ。京都大学工学部卒業。  
立教大学大学院文学研究科組織神学専攻修了。博士（神学）。

専攻は、アングリカニズム、エキュメニズム、組織神学、現代神学。  
研究テーマは、16世紀英国宗教改革の神学を端緒に、時代を超えて通底するアングリカン神学のダイナミズム。  
著書に『聖公会が大切にしてきたもの』（教文館）ほか。  
2021年4月より第22代立教大学総長。  
キリスト教学校教育同盟第28代理事長。  
世界聖公会大学連合会（CUAC）理事。日本聖公会中部教区主教。  
NHK連続テレビ小説『エール』キリスト教考証担当。

## NHK 連続テレビ小説『エール』とキリスト教 キリスト教主義大学が大切にしたいこと - 『敬神愛人』

西原 廉太

2020年11月24日（火）名古屋学院大学「教職員宗教研修会」

みなさん、こんにちは。今ご紹介いただきました、立教学院副院長、キリスト教学校教育同盟理事長をしております西原廉太と申します。どうぞよろしく願いいたします。まず、お礼を申し上げたいのですけれども、実は、キリスト教学校教育同盟の総会を、昨年こちらのまさにこのホールでさせていただくことができました。大変に感謝をしております。全国から102学校法人の代表者がこの名古屋学院大学のこの場所に集まり、名古屋学院大学さんの素晴らしさを、身をもって体験して、皆様、感激とともに感謝をされたところをございます。改めて、理事長といたしましても、感謝を申し上げたいと思います。ありがとうございます。

また、私は日本聖公会の聖職です。日本聖公会は、北は北海道から南は沖縄まで、11の教区、エリアに分かれておりまして、私は、ホームは立教大学なのですけれども、聖職の籍は中部教区の聖職です。中部教区と申しますのは、愛知県、岐阜県、長野県、新潟県、の4県をカバーする教区で、本部は名古屋の御器所にあります。実は、まだちょうど1ヶ月前、先月10月24日に中部教区の主教座聖堂におきまして、第10代の日本聖公会中部教区の主教に就任をいたしました。というわけなので、実はほぼほぼ毎週、名古屋に来ております。立教の方も継続なので、主教補佐という方をお願いしまして、名古屋をカバーしていただいています。また機会がありましたらお招きいただければと思いますし、先日、中部教区が創立しました名古屋柳城女子大学と名古屋学院大学さんと提携を、協定を締結いただいたということで、大変、柳城関係者、喜んでいきます。私も理事の一人として感謝申し上げたいと思います。そういうことで、またこれからもいろいろなお付き合いがあると嬉しいなと思っております。よろしく願いいたします。

さて、本日は、本来は、高見先生からお話いただいでご相談していたテーマが、キリスト教主義大学におけるグローバル化、の話をということで、用意をしておりました。お約束ですので、つい最近までその用意をしていたのですけれども、先週、最後の確認をしている中で、高見先生から、

「せっかくなので『エール』の「敬神愛人」の話も少し入れられたらどうですか」とご提案がありまして、「敬神愛人」といえば名古屋学院ですし、ちょうどタイムリーなこともありますので、今日は急遽テーマをすっかり変えさせていただいて、NHK連続テレビ小説『エール』とキリスト教の話をご期待いただいた方がおられましたら、本当に申し訳ないのですが、また別の機会を頂いてお話をさせていただければと思っております。

ちょうど今週が最終週なのですが、私はNHKの朝の連続テレビ小説『エール』の、“キリスト教考証”という仕事を頼まれて、やらせていただいているところです。なぜこういう話がそもそも私に舞い込んできたかと言いますと、主人公の窪田正孝さんがやってらっしゃったのが古山裕一という役なのですが、モデルは作曲家の古関裕而さんなのですね。その奥さんの金子さんをモデルにした音さん、二階堂ふみさんがやってらっしゃった、音さんの実家が関内家で、関内音さんと言うのですが、その関内音さんの実家、関内家が熱心なクリスチャン家庭であるという設定になった、ということがあります。史実は違ひまして、金子さんはクリスチャンではありません。ドラマということでそういうことになったそうなのですね。それで、キリスト教に詳しくない人はいないかということで、NHKのディレクターが、ネットで検索したら私の名前が出てきて、立教を訪問してください、「こういうことなだけども協力してくれないか」と。最初は軽い話でした。お祈りの形、アーメンの仕方とか、そのあたりとかですね。あと、キリスト教の細かなセッティングなどについて、ちょっとお知恵を拝借していただければそれで十分です、せいぜい2、3回ご協力いただければという話だったのです。ところが、結果的にはどっぷり協力することになってしまひまして、それはそれで、私にとっては勉強になりました。最終的には、セリフの手直しだとか、設定の変更だとか、そういったあたりまでご助言申し上げることになりました。非常に貴重な経験をさせていただきました。

それで、“考証”というのは、どういうことかと申しますと、シナリオを作る、設定を付ける際に、それが限りなく、なるべく厳密に、歴史的に裏付けがとれると望ましいと。ドラマですので、完全に史実どおりにはできないのですが、限りなくそれに近づけるために検証することが私の役割でした。

左側の写真は、最初の方の、今年4月ぐらいのもので、音さん、裕一くんが、まだ小さい頃の、子役の時代の写真です。これはモデルの古

関裕而さんの故郷が福島で、その福島の素敵な古い教会で二人が実は出会っていたという、そういう設定なのです。ロケで使用されたのが、たまたま、聖公会の教会だったのです。「福島聖ステパノ教会」という日本聖公会の東北教区の教会で、スタッフが、福島に赴いてロケ地を探して歩いていた、その時にちょうど偶然、この教会に巡り合っ、ぜひこの中でロケをしたいと思われたそうなのです。それで、この教会でロケをすることになったということなのです。それがたまたま聖公会だったと。ですから、私も別に聖公会だからということで考証を頼まれたわけではなく、キリスト教に詳しくそんな人ということでありました。キリスト教の考証をするにあたりまして、関内家がクリスチャンと言うのですが、キリスト教と一言で言いますが、みなさんご存知のように、カトリックからプロテスタントまで、様々、違いがあります。どこかの教派に定めないと実は考証ができない、設定ができないのです。なので、私は最初のロケ地が聖公会の教会であったということもあり、私も聖公会なので、「関内家は聖公会の信徒だったということにしてよろしいですか」と申し上げたところ、「何でもいいです」ということでしたので、聖公会になったという、そういうことでした。聖公会中部教区には、実際に「豊橋昇天教会」が戦前からあったのですが、関内家は、この教会の信徒だったという設定としました。それで、関内家の設定はすべて聖公会モードで最初から最後までさせていただいた次第です。最初の台本では、聖歌隊が福島の教会にチャリティコンサートに来て、そこに音ちゃんが飛び入り参加をして、そこで聴いていた裕一さんと出会ったという、そういう話なのです。

この聖歌隊を、どうしようかということになりまして、地元の市民合唱団の方をお願いしようかという話もあったのですが、せっかくですからということで、私の勤務しております立教大学の聖歌隊に出てもらうということになりまして、去年の8月でしたけれども、夏休みに立教大学の聖歌隊の女子メンバーに出演していただきました。実際、福島まで行ってロケをしてもらったのです。設定としては、立教大学の聖歌隊が、1920年代に福島のステパノ教会に行って、そこで慈善音楽会をしたという設定でいいですか、と聞かれたのですが、ところがですね、それは問題があるのです。なぜかという、1920年代の立教大学の聖歌隊は全員男子なのです。NHKは女子聖歌隊が良いというので、それは困ったなど。ちょっと無理があるなど。調べましたら、実は右側の写真ですが、1924年に撮られた京都の同じ聖公会の学校の「平安女学院」の聖歌隊の写真が発見できました。実際に当時、「女子だけの聖歌隊」が存在していたという証拠で

した。スタイルも、コッターという白い服を着ていたということが分かりました。そこで、平安女学院の聖歌隊が福島の聖ステパノ教会まで遠征をして、そこで慈善音楽会をやったという、そういう立て付けにいただきました。そのようなことが考証の仕事でもありました。

それから、これも実際にNHKのスタジオで所作指導をさせていただいたものですが、左側は薬師丸ひろ子さんで、右側は多分、学生のみなさんのほうがよくご存知だと思いますが、梅ちゃん役の森七菜さん、それから五郎役のハナコの岡部さん。この3人が一緒に食卓を囲んで、食前のお祈りをして、そしてアーメンを唱えるというシーンです。これは聖公会スタイルなのです。その時のお祈りを薬師丸ひろ子さんがなさって、「主よ、これらの食卓を祝したまえ、アーメン」と唱えるのです。これも、当時の日本聖公会の文語祈祷書に則った形のお祈り、食前のお祈りを薬師丸さんがやってくださったのです。こういう指導などをします。それから、これは戦中のシーンですが、関内家はじめ、クリスチャンたちが特高警察の監視状態に置かれて、礼拝もままならなくなった場面です。そして、信徒家庭に集まって、集会を持っていたというストーリーです。その時に、登場するのが聖公会の司祭なのです。最初NHKから提案があった司祭のスタイルは、なにか怪しい宗教団体のような格好をしていましたので、それは困るということで、当時の1940年代の写真ですが、日本聖公会の聖職者たちの写真ですね、こういう、御覧いただいたら分かりますけれどもね、首の周りが、この「ラウンドカラー」と言いまして、一周回るカラーですね、ドッグカラーとも言います、みなさんしています。今は、「タブカラー」と言いまして、差し込み式が結構一般的なのですが、当時はタブカラーではなくラウンドカラーでした。そんなことを細かくチェックしまして、この右側のように、100%正確な司祭の服をご準備いただいたのです。この左側の司祭役の俳優さんが持ってらっしゃる聖書は、これは私の私物である、「大正改訳」という本物の新約聖書をお貸しして持っています。こちら、『エール』の最初の方で、音さんのお父さん、安隆さんが亡くなるのですが、最初、NHKの設定では、仏壇の中に十字架とかが置いてあったのです。いくら聖公会は緩やかだと言っても、さすがにそこはちょっとということで、急遽、仏壇の前に机を特別に用意していただいて、白布をかけていただき、特別の祭壇を作っていただきました。そして、その上に聖書と祈祷書を置いていただいたんですね。これが祈祷書なのですが、これも私の私物です。1938年に出版された日本聖公会の当時の祈祷書なのです。なので、実は、そんな解説はどこにもありませんが、エールに登

場しているキリスト教アイテムには結構本物が多いのです、作ったものではなくて。ちょうどこの祈祷書は、最後までどこかに登場していたらしく、確認していませんが、つい先週、NHK から戻ってまいりました。そういうことを、考証としてはやっています。

関内家で、娘三姉妹と、薬師丸ひろ子さんの光子さんですね、お母さん、そして、光石研がなさっている安隆さん、お父さんが居間で踊っているシーンなのですが、何気に見ていると、一般の方は全然気にも留めないと思えますけれども、NHK から、こういうオファーがありました。「扁額を居間に飾りたいのだけれども、なにか適当なキリスト教的な四字文字はありませんでしょうか」という、そういう質問が来たのですね。そうですかと。じゃあ何が良いかと真っ先に思いついたのが、ちょうど後ろにある名古屋学院さんの「建学の精神」の標語である「敬神愛人」ですね。多分これしかないと思いました。それで、実を言うと、これは理事長や学長にもご許可をいただかなかったので申し訳なかったのですが、ホームページのクライン先生のところに「敬神愛人」の写真があるので、それをサンプルです、と NHK に送ったのです。この「敬神愛人」の扁額がずっと関内家に飾られていました。関内家の居間のシーンで、ときたま映っていました。これは、私は大変嬉しかったのです。視聴者の方は、なにか文字が書かれているなどというくらいにしか思われないうのですけれども、視聴率 20% ですから、3000 万人ぐらい視ているのですね。そんな方々が、何気に「敬神愛人」という、しかもこの、良く模倣していますよね。きっと、トレースしていると思います。名古屋学院さんの「敬神愛人」を下敷きにさせていただいて、それを見事に作ってくださったのです。私は、ぜひドラマが終わって使わなくなったらこれを譲っていただけませんか聞いたことがあります。「長崎の鐘」も立派なものですが、それらをぜひ教材でも使いたないので、もし要らないならお譲りいただけませんかとお願したところ、「西原先生、すみません、NHK の美術の子会社がありまして、そこで管理することになっています。万一、処分ということになれば必ずお渡ししますから」ということでした。

「長崎の鐘」について、少しお話をさせていただければと思います。「長崎の鐘」のシーンも、大変素晴らしいシーンでした。この考証も結構大変だったのです。先月、10月22日、23日のテーマが「長崎の鐘」でした。古関裕而さんがモデルの古山裕一が、長崎に永田博士を訪問するという。永田博士とは、永井隆博士がモデルとなっています。『長崎の鐘』を作曲するにいたるという、ドラマの中でもメインどころのシーンでした。NHK からは、

永井隆博士のゆかりの家である「如己堂」や、博士が大切にされていたものや、長崎のカトリックの方々所作を、なるべく忠実に再現したいということ、そして何よりも、長崎の鐘を忠実に、史実に基づいて限りなく正確に再現したいのだという熱い思いを送ってくださったのです。私も取り組み始めたのですが、ただ、私は聖公会で、聖公会やみなさんと同じプロテスタントの事情や事柄については、それなりによく分かっているつもりなのですが、カトリック、ことに長崎のカトリック関連については、より正確さを期すために、私が個人的にも大変お世話になっております、日本カトリック司教協議会会長をされている、カトリック長崎大司教区の高見三明大司教様に、直接ご協力をいただくことにいたしました。大変お世話になっておまして、先月、名古屋で行われた私の主教授手式にもご臨席くださいました。さらに、元上智大学副学長で、現イエズス会日本管区長補佐をなさっている山岡三治先生、そして、ご存じの方もおられるかもしれませんが、イエズス会の川村信三神父さんにも適切なアドバイスを頂戴した次第です。

長崎のカトリックの女性信徒はよく白いベールをかぶるという特徴があります。現在のカトリック教会ではあまり見られなくなった習慣なのですが、長崎の女性の信徒さんたちは、19世紀のフランス教会の影響を強く受けているということもあって、今でも白いベールを長崎で見ることができます。永井隆博士の時代はほぼ間違いなくすべての女性信徒が白いベールを着用していたということ。そして、カトリックの女性信徒たちは手に「ロザリオ」を持っているということですね。男性がロザリオを持つこともあるのですが、あくまでもロザリオというのは祈りの道具であって、決して首からかけないということなのです。これは裏話なのですが、4月の、私が考証に入る前から NHK が用意していたものが「ロザリオ」でした。これが、薬師丸ひろ子さん演じる光子さんが愛用しているものなのですが、台本にも「ロザリオ」と書いてあるのです。実際、ロザリオなのです。これには困りました。聖公会の信徒がロザリオを持つことはないのですが、しかし映るのは一瞬ということでしたので、この程度ならロザリオということとはわからない、「十字架」ということで良いかということで、ずっとそのままにしておいたのです。また後でご紹介しますが、後に敗戦直後に、薬師丸さんが演じる光子さんが、歌を歌うシーンがあるのですが、そこでは、薬師丸さんが首からロザリオをかけている。ちょっと迷ったのですけれども、あえて、光子さんはカトリックじゃないのでロザリオを持ってはいない、ロザリオを持っているのは、カトリックの関係

者から譲られたか何か、彼女はロザリオとしては使ってはいない、十字架として使っているという、そういう設定にさせていただいたのです。台本ではずっと「ロザリオ」と書かれていました。『エール』を今朝ご覧になった方、おられませんか。少しだけ映りましたよね。豊橋の伊古部海岸で三姉妹が並んで、真ん中に二階堂ふみさんが演じる音さんが十字架を持っているシーンがありました。これは、本当は色々セリフがあったのですが、台本上は「このお母さんのロザリオ、お姉ちゃんが持っておき」というように梅ちゃんが渡すというシーンがありました。私は、少し困って、そこは「ロザリオ」とは言わないで、「これ」とか「この十字架」とかね、そういうふうに変えてもらえませんか、と。そして、結局、「これ」という台詞になりました。それで収録されたはずなのですが、多分時間がなかったのですね、セリフもカットされて、三姉妹が無言で伊古部海岸に立っているシーンだけになっていました。それはそれで良かったのですが。

「長崎の鐘を囲んで信徒たちが祈ってもよいか」という質問がありました。鐘を周りに囲んだ人たちが、鐘に向かってお祈りをするのはどうか、という質問です。それについて、実際に高見大司教に確認しましたところ、こういうお返事でした。「鐘そのものを拝むのではなく、その鐘が、原爆と戦争の犠牲者の嘆き、悲しみ、苦しみを思い起こさせ、平和を告げる象徴的な道具であることを考えて、心を神様に向けて、原爆と戦争で命を奪われたり傷ついたりした人々のために祈ると同時に、平和を祈ることであれば、鐘に向かってお祈りすることは全く問題ございません。カトリックでも一般に両手を合わせて祈ります。しかし、厳格な規則があるわけではありませんので、場合によって、あるいは人によっては手を組むことも通常にあります」というご回答を頂いたわけですね。それらを全てまとめてNHKには伝えて、このシーンとなるわけです。しっかり考証どおりにしてくださり、ベールをかぶって、お祈りをして、ロザリオを持っているのですが、ロザリオは首からかけないで手から下げて、手を組んでいる人もいれば、手を合わせている人もいます、という形なのです。

私が今回の考証で感動したことは、『エール』のスタッフのプロフェッショナルな仕事ぶりです。「長崎の鐘」、正式には「アンジェラスの鐘」と言いますが、しかし、「アンジェラスの鐘」、「長崎の鐘」の再現にかけるスタッフの熱意です。そして実際に完成したアンジェラスの鐘のレプリカの完璧さに、私は正直言って言葉を失いました。長崎の復興を印象づけ、希望あふれるシーンにするために、鐘をできるだけ史実に基づいて作成したいというNHKスタッフの要望を受けて、高見大司教に、鐘の詳細の資料は無

いかと問い合わせました。ところが、実は長崎のカトリックのみなさんの方でも、詳しい資料が無かったのです。この機会にということで、高見大司教さんが、あれこれ手を尽くして調べてくださいました。それはとても、感動的でした。鐘の歴史的な経緯も分かり、これは元々、1925年に完成して、大きい鐘と小さい鐘が吊るされていた、大小の鐘なのでした。この鐘が作成されたのはフランスのドゥエーというベルギー国境に近い街にある鑄造工房で1922年に制作されたものということなのです。大きな鐘は毎日鳴らされていて、主日（日曜日）、祝祭日には小さい鐘の方も一緒に鳴らされたので、荘厳な音を鳴り響かせていたということです。1945年8月9日に原爆によって浦上天主堂が全壊した際に、爆風で吹き飛ばされた左側の塔は、鐘もろとも石垣下の川の側に転落したということです。それで、小さい鐘は数個に割れて、いま一部が浦上教会の信徒会館に展示されています。右側の塔の大きな鐘は、その年、1945年12月14日、瓦礫の中から見つかって、それが掘り出されて、材木を三叉に組んでチェーンブロックで引き上げられました。永井博士も立ち会われて、作業が午後3時過ぎまでかかったという証言がありました。その日の真夜中のミサのために、久々に、久しぶりに鐘が鳴り響いたということなのです。鉄骨製の鐘楼は、翌年の1946年12月に完成し、クリスマスイヴのために鳴らされました。図面によりますと、鉄製の鐘楼は、もう少し左手に上がったあたりにあった。現在の浦上天主堂の右側の塔に吊るされていまして、今も素晴らしい時を告げています。これが掘り出された時の写真です。これも高見大司教さんからご提供いただいたものです。

その「アンジェラスの鐘」の再現にあたりまして、最も難しかったのは、鐘の表面に刻まれている銘文を再現することでした。ラテン語で刻まれているわけですが、写真だとよくわからないのです。そこで高見大司教に相談したところ、高見大司教も実は正確なことは分からないので、これを機会にということで調べてくださいました。高見大司教は、鐘の刻銘のラテン語原文のみならず、その日本語訳についても丁寧に検証してくださいました。高見大司教によれば、ラテン語原文はかなりの難文で、高見大司教ご自身が下訳をされた上で、ローマでラテン語の教授をなさっていた方にチェックをしていただき、カナダ人の聖職養成神父にもセカンドチェックを依頼されて、回答をいま待っています、というお返事でした。私はさすがに恐縮してしまいました。実際の放映時にはおそらくほんの僅か、1分か2分ぐらいしか放映されないのでは、刻銘までははっきりと映されない可能性も高いので、これ以上、ご多忙な高見大司教様の手を煩わすことは忍

びないとお伝えしたのです。高見大司教さんからすぐにこのようなお返事が戻ってきました。「この翻訳は私たちにとっても記録として残しておきたいので、正確を期したいと考えている次第です。翻訳とともに、浦上天堂の鐘の歴史をまとめたものもご参考までにお届けいたします。鐘の位置や、壊れずに現在に至っている鐘が、大きい方なのか小さい方なのかについて情報が錯綜していましたが、なんとか事実を確認できました」。これには感激いたしました。ドラマの考証の調査で、少し情報をいただきたいだけだったのが、結果的にカトリック教会も今まで調べきれいいなかった、鐘の銘文とか、原文の意味、日本語訳、その背景について、今回正確に分かったのです。高見大司教さんが本にまとめてらっしゃいますけれども、そのような効果もあるということなのです。決して、ドラマのためだけに役に立ったわけではない。日本のキリスト教史や、これからの平和を覚える意味でも、重要な作業がこのドラマの背後にはあったということです。

これが、銘文の拡大写真です。訳文の意味ですけれども、「寄贈者は、母の意向に沿って、わたし（鐘）をマリア・ジョゼファと名付け、宣教師とマリア会士が日本人を神に導くために熱意に燃え献身する愛のしるしとして設置した。コンバス長崎司教聖別 現地司牧者ヒューゼ師 西暦 1922 年」、「わたし（鐘）は、毎日喜びにあふれ甘美な音を響かせて、祭壇上の神と天使のあいさつを受けた神の母マリアをたたえ、信者たちに魂のことを気にかけるよう勧める」ということが書いてあるそうなのです。さらにこの写真を手に入れましたので、すべての情報をまとめてNHKに考証経過として回答いたしました。NHKからは、美術に確認したところ、これらの諸資料をもとに、「アンジェラスの鐘」の再現が可能であるとの返答があって、実際に出来上がったのがこれです。これは、NHKのスタジオにあるレプリカです。完璧ですよ。私は感動いたしました。ラテン語一字一句間違っていない。放映されたのがこれです。一瞬映っていましたよね。全国の視聴者の中で、どれくらいの方が、このラテン語がわかったかどうか、これが厳密に正確にラテン語であるということが、どこまで伝わったか分かりませんが、まさに、本物とまったく同じに完璧に再現された「アンジェラスの鐘」、「長崎の鐘」だったのです。

こういう当時の写真なんかも出てきました。これが「長崎の鐘」の原爆直後のものですね。これは、被爆マリアです。被爆マリアは左側に立っています。実はNHKが当初マリアだと思っていたのはアグネスでした。アグネス像はいま、国連本部にあります。マリアの方も、左側に立っていますよね。右側はヨハネなのですが。ドラマでも、最初、マリアの位置は右

側に置かれていたものを、正確に左側に持ってきていただきました。これも、視聴者はまったく気にしていませんが、これも考証の結果です。しっかりと門の左側に立っているわけです。

この掘り出された鐘を釣り上げた写真をぜひドラマの中で使いたいという申し出がありました。ただ、1956年よりあとに撮影されたものであると著作権が切れていないということなので、撮影者を辿りまして、結局、この写真の所有者、この脚立に乗っている森内さんという方の息子さんが所有者であったので、森内家にNHKから依頼していただいて、許可をもらって、実際にこの写真がドラマで一瞬映りました。

『エール』の「長崎の鐘」シーンで、印象深かったのは、如己堂の病床にある永田先生と答えを求めて苦悩する古山裕一の印象深い会話でした。永田博士は裕一に、原爆の悲惨に直面したある青年の問いを裕一に語ります。こういう問いでした。「神は本当にいるのでしょうか。」その問いに果たして答えはあるのか、苦しむ裕一を見つめながら、永田博士はこうつぶやきます。「自分を見つめて、自分を見つめても何も見つからない。そうではなく、落ちて落ちて、どん底まで落ちろという言葉の中にこそ、あなたの求めている答えがあるはずだ」と促します。長崎原爆の爆心地にある教会の瓦礫の中で、裕一は、ある言葉が書かれた壊れた壁の前で立ち尽くします。それがこのシーンですが、ここに書いてあるのが、「どん底に大地あり」という言葉です。この言葉を前にして、裕一はまさしく絶望の中から希望の音が立ち現れる、あの『長崎の鐘』という曲を生み出すということになります。この「神は本当にいるのか」という問いは、古代から中世、ルネッサンス、宗教改革、近現代に至るまで、人間が苦闘し続けてきた根源的な命題にほかならないのですが、神学的には「神義論」という領域になる重要なテーマです。つまり、全能かつ善で、完全無謬なる神が、何故にこの世界に悪や苦しみを作られたのかという問いです。今回、カトリックに関する考証にもご協力いただいた、イエズス会の川村信三神父は、カトリック新聞にこう書かれています。

「エールの永田医師は、これまでにない一つの答えを付け加えたように思いました。どん底まで落ちろ。自分自身を振り返っているうちは、希望は持てない。どん底まで落ちて大地を踏みしめ、ともに頑張る仲間がいて、初めて真の希望が生まれる。どん底まで落ちた人間にとって、その大地に踏ん張って立った人間にとって、神は本当にいるのですかという疑問ではまだまだ足りない。どん底で見つけるものは、悲嘆や諦念、自暴自棄ではない。むしろ人間がそこで見出すのは、希望でしかないという真理は、自

らどん底を体験した医師・永田だからこそ、おかれる真理なのでしょう。裕一はこのことに目を開かれていきます。キリシタン史の中でも、神への信仰を捨てず殉教した多くの信徒がいました。神などいないと背きながらも死ぬまで神を追い求めた哲学者たちもいます。震災の瓦礫と泥溜まりの中、死臭漂う現場で、生き続けようと決意した人々がいます。そうした人々は例外なく、底のどん底の大地に立って、歩み始める何かを見つけることができた。人々が諦めなかったのが、そのなによりの証拠となります。そういうことを思い起こさせてくれる『エール』の神回でした。

薬師丸さんの歌もそうですけれども、死から復活、絶望から希望へという神学的なメッセージが、まさに、通奏低音のように流れているように思うわけです。『エール』のストーリーというのは、実は一貫していて、見事だなと思いました。つまり、「絶望から希望」なのです。それがすべてに貫かれていました。

10月の16日に放映された回、ご記憶でしょうか。薬師丸ひろ子さんが、日本が敗戦を迎えて、そして豊橋空襲で、関内家は焼けてしまうのです。その焼け果てた自分の家を薬師丸さん演じる光子さんが歩いて、そこで光子さんが、ある歌を歌うのです。それが実は、賛美歌でした。「うるわしの白百合」という賛美歌を歌われたというシーンが大変話題になりました。本当にこのシーンは素晴らしかったと思います。私も一視聴者として視ながら感動しました。「うるわしの白百合」の賛美歌ですが、これは実は、当初の台本では、薬師丸ひろ子さん演じる光子さんは、「『戦争の、こんちくしょう！こんちくしょう！』光子、地面をうなりながら叩く」って書いてありました。これが、台本上の表現だったのです。ところが、薬師丸さんからは、ここは地面を叩くのではなく、賛美歌か、なにか歌が良いではないか。賛美歌の「うるわしの白百合」などがこの場面に適当ではないかというご提案があったのです。薬師丸さんサイドから私の方にこの問い合わせが来まして、私も検証いたしました。私が応答したのは、こういうことです。

「薬師丸ひろ子さんの提案は、大変素晴らしいアイデアであり、『うるわしの白百合』は、今回の敗戦の知らせを聞いた光子の様々な思い、ことに復活、新たな生命の再生を願って、また、光子自身のクリスチャンとしてのアイデンティティを何にも規制されることなく歌うことができるという、その思いを表現するという意味でも、ぜひ薬師丸ひろ子さんのご提案が実現できることを私も期待します。このようなご提案をされる薬師丸ひろ子さんに、正直、改めて感激いたしました。関内家は聖公会という設定で

すが、『うるわしの白百合』は、聖公会の聖歌集にはなく、日本基督教団の賛美歌に収録されたものです。しかしながら、ミッションスクールをはじめ、広くキリスト教関係者の間で親しまれた歌なので、光子が愛唱していたとしても不思議ではありません。『うるわしの白百合』は、現在の『賛美歌』496番（1954年発行）、その譜の下にある“509”という記載は、1931年、昭和6年版賛美歌の該当賛美歌番号です。『讚美歌略解』によれば、この曲の出典は不詳。音楽的に価値の高い曲ではないが、わが国で広く愛唱されているので、この版に残された。原曲は前半の16小節に記譜法上了解し難い点が多かったので、原作曲者の意図をできるだけ尊重しつつ、小泉功が全般的に譜を書き改めた、とあるので、おそらく1931年版に、原曲に近い形でこの曲が収録されていたのではないかと予想できます。したがって敗戦時に『うるわしの白百合』が歌われたとしても問題はありません。

その後、更に調べて、以下の補足のメールを送りました。「1931年版『讚美歌』にもしっかりと『うるわしの白百合』が収録されていました(509番)。歌詞もほぼそのままであることが確認できました。大正から昭和初期に、とりわけ女子学生の間で愛唱されたようです。しかし、19世紀にアメリカで創られたこの曲は、宗教的内容が乏しい、音楽的にも価値が高くないとの評価で、早くからアメリカの歌集からは姿を消してしまいました。多く愛唱されているという理由などで、日本だけに生き残ったもので、1954年版『讚美歌』でも「雑」という項目に分類されていました。1997年に『讚美歌21』が発行された時に、そのような理由から残念ながら消えてしまった賛美歌のひとつであります。おそらく高齢の方々には懐かしく思われる方々も多いと思われます」。そういうお返事をNHKにしたところ、急遽、そうであればということで、滅多に無いのですが、台本が、役者さん、薬師丸ひろ子クラスだからということですが、ご提案で私の考証を経て、大丈夫だということになり、急遽変わったのです。当初、わずか30秒のシーンが、薬師丸ひろ子さんが「うるわしの白百合」を歌われることになりました。

さきほども申し上げたとおり、私が悩みましたが、関内家は聖公会の設定なのです。歴史的には、「うるわしの白百合」は聖公会の聖歌集にはなかったのです。そこで、私は以下のような設定を提案しました。光子は、名古屋にある1889年創立の金城女学校の卒業であった。学校でよく「うるわしの白百合」を歌い、親しんでいた。光子が焼け跡で拾い上げたのは、日本聖公会の聖歌集ではなくて、金城女学校時代に彼女が大切にしていた讚美歌だったということにいたしました。実は、聖公会中部教区のある司

祭さんのお母さんが、実際に金城女学校の卒業で、なんと、「うるわしの白百合」は日常的に親しく歌っていたというのです。みんな歌っていた、今でも大好きだと言うわけです。ですから、そのお母さんはもちろん聖公会の信徒さんなのですが、聖公会の信徒さんで、かつ女学校で「うるわしの白百合」に親しんでいた実例がいくつも見つかり、これは歴史的にも間違いないだろうということで、そういう設定となりました。ただ、光子が生徒時代に用いられていた『讚美歌』を再現することは、日本基督教団の『讚美歌』の扱いはとても厳密なのでなかなか難しく、最終的には、日本日曜学校協会が編纂していた『日曜学校賛美歌』というものが当時あって、それをサンプルに、私が理事長をしていますキリスト教学校教育同盟の前身なのですが、基督教教育同盟會が編纂した『基督教學校 讚美歌』というものを設定として作り、そしてそれを薬師丸さんが拾って、手にされているという形にさせていただきました。これも、実際の放映ではほぼ映っていないのですが、NHKの美術が、急遽、わずか2日、急遽の変更だったので、収録まで3日ぐらいしかなかったところ、わずか1日2日で、見事に作ってくれました。

1.

うるわしの白百合 ささやきぬ昔を  
イエス 君(きみ)の墓より いでまし昔を  
うるわしの白百合 ささやきぬ昔を  
百合の花 百合の花 ささやきぬ昔を

2.

春に会う花百合 夢路よりめさめて  
かぎりなき生命に 咲きいずる姿よ  
うるわしの白百合 ささやきぬ昔を  
百合の花 百合の花 ささやきぬ昔を

私は、最初はこれ多分、放映自体は30秒ぐらいだと聞いていたので、まあ2節の一部の、前の一節分くらいだけ放映されるのかなと思っていたのです。歌詞の方も、2節のところ、「かぎりなき生命に 咲きいずる姿よ」、その部分だけ歌いますかという提案をしていたぐらいなのですが、ところが、実際には、薬師丸さんは全節暗唱をされてきていて、そして、歌われました。聞いていただいたように、絶唱だったわけですが、実は、

監督のカットがかかっても、広いスタジオは深い沈黙に包まれたままでした。私はモニターを見ていたのですが、その両隣りに若いAD、スタッフがいたわけですが、二人とも泣いているのです。目を真っ赤にしながらか泣いていました。私も、胸を締め付けられながら、涙が溢れて止まらなかった。吉田監督は、このように書かれています。「薬師丸さんが体現する悲しみと、そこから立ち向かわなくてはならないという力強さを歌から感じたので、もう芝居じゃなくなっているなと思いました。みんなそれぞれが何かを感じ振り返る時間になっていて、それを朝ドラの尺の15分の中でやることに勇気と迷いがありましたけど、さすが薬師丸さんだと思いました」。確かに、その現場は、もはやドラマ、芝居じゃなかったと思います。ご承知のように、新型コロナウイルス感染症蔓延と、それに伴い『エール』も、収録中止、放映中止、10話分カットという、収録開始には想定していない非常事態に直面して、それから、収録再開後も、極限の感染対策、神経をすり減らす中で、それでも良質なドラマを作りたいという『エール』の制作陣、泣いていた若いADたちも含めて、一人ひとりの中に、この歌が、薬師丸さんの「うるわしの白百合」の歌が、深い深いところで響いたのだらうと思います。

私は、収録直後、この場面は間違いなくNHK朝ドラ史上の名場面になるのではないかと確信しました。今回、放映でただの一秒もカットされませんでした。15分の朝ドラで3分間、全節流されたのです。私は本当に感動いたしました。確かに、歴史的な名場面となりました。この、薬師丸ひろ子さんの「うるわしの白百合」の持つ意味は、ご覧になった方々それぞれによって取り方が違うと思います。ご承知の通り、この「うるわしの白百合」という賛美歌はイースターの歌です。復活を歌う歌です。戦争、暴力、死、絶望を悲しみながら、しかしながら、そこにとどまるのではなくて、未来の平和や生命、生、人間の尊厳、希望を願い告げることの大切さ。そこには、さきほどの「長崎の鐘」のときも申し上げましたけれども、死や絶望から、生命、復活へという神学的なメッセージが流れています。実は、『エール』をご覧になっている方はお分かりいただけるかと思いますが、古山裕一が、自分が作曲した歌に鼓舞されて、そして、予科練の兵士として、戦地に赴いた弘哉くんという若い青年が、戦死します。弘哉くんの壊れたハーモニカをお母さんが持って来られるのですが、それを前にして、古山裕一は、こうつぶやくのです。「音楽で人を戦争に駆り立てることが、僕の役割なのか。若い命を奪うのが、僕の役目なのか」と自問するわけです。そしてついには、「僕は音楽が嫌い」と言うのです。その絶望的な



つぶやきに対する見事な答えが、応答こそが、今お聴きいただいた、光子の「うるわしの白百合」なのではないかと思えます。

本当の意味での「エール」とは何か。音楽の力、あるいは祈りの力。光子は、裕一や音、残されたこれからの世代の未来を覚えて歌った、あるいは、祈ったのではないか。この光子は、先程申し上げたとおり、キリスト者として戦中、特高警察から監視される中、礼拝をすることも、地下のような場でひっそりとしなければならなかったわけですが、いま光子はようやく、声高らかに自分の大好きな愛する聖歌を歌うことができる。十字架も堂々と身につけることができる。そのことの喜びが、間違いなく大きなものであったと思えます。しかし、豊橋空襲で、設定としました光子が愛した教会、日本聖公会中部教区豊橋昇天教会も、関内家が消失した日と同じ、1945年6月19日の空襲で全焼しています。現在の豊橋昇天教会は1949年11月3日に再建されたものです。お見せした場面ですが、「うるわしの白百合」を歌い終わった薬師丸ひろ子さんが、ゆっくりと優しく十字架をその手に包む、これも事前に私と薬師丸さんとで相談させていただいた姿なんですけれども、とても美しいと思えます。この祈りの姿には、世を去ったすべての人の魂と、今を生きるすべての命を優しく包む祈りにしたいという、そういう思いがあって、このシーンとなっています。このような祈りを、見事に表現された薬師丸さんに本当に感謝をしたいと思えます。

実は、薬師丸さんに、スタジオ前室で、どうして「うるわしの白百合」をそもそもご存知だったのですかと伺いましたら、彼女が通っていた玉川大学のチャペルで、よくこの「うるわしの白百合」を歌われていたことを教えていただきました。実は、いまお話したことを、私のFacebookに、自分用のメモで書きました。そうしたところ、クリスチャンだけでなく一般の方も含めて、たくさんのかたが読んでくださって、Facebookの「いいね」が5000、「シェア」が3000とかになりました。それで、『プレジデントオンライン』というビジネス誌の編集者も読んでくださって、このFacebookの記事を転載したいというご依頼があって、『プレジデントオンライン』の記事になりました。それが一時、ランキングで「1時間」、「週間」、「いいね!」、「会員」、全部1位になりました。1週間で100万ページビューを超えたのです。よく「100万人の福音」と言いますけれども、まさにそういう感じでした。この私の記事を読んでくださった方々から、しかもクリスチャンじゃない方々から、たくさんメッセージを頂戴いたしました。その一つ一つがとっても素晴らしい物語で、感動的だったのですが、3つだけご紹介します。

「私の祖母は、ミッションスクールに行っていたので、『うるわしの白百合』が大好きでした。祖母の兄は戦時中クリスチャンとして、戦争に加担してはいけないという強い信念を持っていました。そのため検挙され、体調が悪化し亡くなりました。祖父が出征中、祖母は4人の子どもたちを育てるため、山を越えた土地を耕し、食べ物を作っていたとも聞きました。いかに苦勞したのかが忍ばれます。祖母を支えていたのは、この信仰心だったように思います。賛美歌を愛し、いつも温かく私たちも見守ってくれるおばあちゃんでした。10月に亡くなった祖母のこと、戦時中の家族のことを思いながら、胸が一杯になりました。」

「朝から泣きました。確かに明治学院の賛美歌集にもありましたね。このところ、仕事もうまくいかず、自分が何のために生きているのか分からないような思いでした。そんな中、かつて明学のチャペルで歌った『うるわしの白百合』の言葉の一つ一つがずーんと心にきて、気づいたらボロボロ泣いていました。もう一度、昔の讃美歌を引っ張り出しています。明日からまた頑張れそうな気がします。」

もうお一方だけご紹介したいと思います。

「私は89歳の母と二人暮らしです。母は認知症が進み、ほとんど会話もありません。母の介護に疲れながらも、朝食後に母と『エール』を見るのが、ささやかな私の楽しみです。いつも母は、テレビを眺めながらも、ただぼーっと見つめているだけなのですが、今朝、薬師丸ひろ子さんが、『うるわしの白百合』を歌い始めたところ、最初から2節の最後まで、涙をいっぱい溢れさせながら一緒に歌ったのでした。キリスト教の学校に行っていた母は、きっと生徒時代に楽しく歌ったのでしょね。その頃の記憶がきっと蘇ったのだと思います。私もそんな母を見ながら、思わず涙が溢れてしまいました。」

この他にもキリスト教学校に通って今はクリスチャンでもなんでもないけれども、「うるわしの白百合」とともに、かつての大切な記憶や物語が蘇ったとかですね、教会に行ってみたいと思ったという声が無数にありました。そうした物語の一つひとつが、実に感動的なのです。そういう意味では、名古屋学院さんもそうなのですから、このようにして、チャプレンの先生方や、聖書の先生方が、キリスト教をこの学校で、聖書や賛美歌を、学生たちに伝えていらっしゃると思いますが、それはいわば、蒔かれた種であって、それが様々な形で、必ず芽吹くことを確信したのです。ともすると、私たちは自分たちのキリスト教教育に自信が持てなくなるときがあるのです。本当に子どもたちの心の中に届いているのか、はたして

効果があるのか、と。しかし、私たちのキリスト教教育とは「種蒔き」であると思います。それを、いつかは神さまが必ず芽吹かせてくださる。そのことに信頼しながら、私たちも精一杯、自信を持って、これからの日々のキリスト教教育を担っていければと思いますし、名古屋学院の皆様が、このように宗教研修会を教職員でもっていらっしゃることも、まさにそのような意味があるのだらうと思います。

最後になりますけれども、クライン博士が、名古屋学院の「建学の精神」とされたのが、「敬神愛人」という言葉です。聖書には、「主を畏れることは知恵のはじめである」とあり、人間のおごりを戒め、そして、隣人を自分のように愛しなさい、一人では生きていけない人間だからこそ、他者を愛することの大切さを説いている。名古屋学院さんが常に語られている言葉ですが、「敬神愛人」を英語で表現すると、“Fear God, Love People”、神を敬うことが Fear、つまり恐れよという意味であるということに、現代に生きる私たちは気づく必要があるということです。人間のおごりを戒め、一人ひとりの調和を説く、この「敬神愛人」の精神というものが、まさに名古屋学院さんの歴史と今に、その教育の根幹にしっかりと根を張り、息づいておられるものと思います。「神を愛し、人を愛する」。神を愛すること、普遍的真理を探求することと、人を愛すること。つまり、この世界、社会、隣り人のために働く者を生み育てるために、私たちの学校は存在しています。名古屋学院が大切にされてこられた「建学の精神」の意味を、私たちはあらためて確認したい。今回、どれだけの視聴者が気づかれたかはわからないけれども、しかし、世の中の、日本の 3000 万人の人たちに、この、みなさんの「建学の精神」である「敬神愛人」という言葉が伝わる機会があったのです。拙い話でしたけれども、時間も過ぎていきますので、ここで私の話を終えさせていただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

## NHK 連続テレビ小説『エール』とキリスト教 キリスト教主義大学が大切にしたいこと - 『敬神愛人』

西原 廉太

チャペルブックレット No.24

---

2021 年 3 月 30 日発行

編集・発行

名古屋学院大学 宗教部／キリスト教センター  
〒456-8612 名古屋市熱田区熱田西町1番25号  
TEL 052-678-4096

印刷 有限会社 五十嵐印刷社